

江 艾 渡





澁江

— 第9号 —

目次

大阪経済大学刊行物案内	2
目次	3
学園だより	4
国庫補助を増大せよ……福井 孝治	4
同窓会本部だより	6
澁江第9号発刊にあたって	6
……渡辺 達好	6
同窓会支部だより	8
東海支部、京都支部、神戸支部、	
姫路支部、岡山支部、九州支部、	
福井支部、大阪市役所支部、	
8回生の集い	
最近の学生生活について	12
ある老学徒の夢……荒牧 博之	15
ゼミ短信	16
田園地帯も都市化して……菊田 太郎	19
思い出の先生(1)・渋谷先生	20
北から南から	22
編集後記	26
学歌・逍遙歌	27

大阪経済大学刊行物案内

■大阪経大論集 (大阪経大会編)

昭和25年に創刊された「大阪経大論集」は、一度も滞ることなく刊行され、現在第96号が印刷中である。隔月(年6回)発行になってはや数年を経た論集は、毎回数篇の学術論文が掲載されており、同窓生諸氏にも思い出深いことであろう。来年の5月には、100号記念論文集が企画されており、昭和高商時代からの総目録もあわせて編纂中である。

大阪経大会賛助会員として論集の購読を希望される卒業生諸氏は、年額 500円を、学会事務局(大学内)まで送金下されば、発刊の都度お手元に郵送されます。

■経営経済 (中小企業経営研究所編)

本学に中小企業経営研究所が設立されて以来、毎年1回出版されてきた「経営経済」は、中小企業問題を中心テーマにした学術論文集である。現在、知識集約化特集号として第10号が編集されており、研究所設立10周年の意味合いも込められたその出版が期待されている。

■『中小企業季報』 (中小企業経営研究所編)

昭和47年春より、中小企業経営研究所の新事業として「中小企業季報」が刊行され始めた。この季報(年4回)の出版には、学外の多数の中小企業問題研究者の協力と、資料室の充実があればこそ実現できた画期的な出版事業である。内容は毎回三部にわかれ、二篇の論文と30点近い書評、そして最近3ヵ月の文献目録である。広く中小企業に関係する機関、個人に利用されている。購読希望の卒業生も多数あると思われるが、申し込みは直接研究所宛に連絡して下さい。(年額 1,000円)

■『経営研究所 研究シリーズ 1』 (経営研究所編)

経営研究所の「研究シリーズ第一冊」として、浜本泰教授著「企業の資本構成是正論序説」が出版された。第二冊は松尾竹彦助教授により近刊の予定である。

(近刊案内)

■『経営経済学の基調 (池内信行教授追悼論文集)』 (経営研究所編)

経営研究所の初代所長であった池内信行教授が昨年お亡くなりになったことは、卒業生諸氏もよく承知のことであるが、故人の追悼論文集が現在経営研究所において編集集中である。学外のゆかりの先生方にも執筆願ったその追悼集は、来春森山書店より市販される運びとなっている。あらためて故人の冥福と経営研究所の発展を願う次第である。

■大樟論叢

大阪経済大学大学院経済学研究科・大学院生協議会は、院生の研究発表の学術機関誌として『大樟論叢』を発行しています。昭和46年9月創刊号の発刊以来、現在まで第4号を発行しています。

広く同窓会々員の方々にも購読していただきたいと思ひます。

購読を希望される方は下記によりお願ひいたします。

- 1.年間 2回発行 ¥ = 600円
 - 2.分売 各号 ¥ = 300円 プラス送料(1~4号まで在庫あり)
- 送付先を銘記の上代金を添えてお申込み下さい。
 申込先 大阪市東淀川区大隅通2丁目
 大阪経済大学大学院 院生協議会

■経済史文献解題

公刊された経済史関係の著書・論文・資料等に、それぞれ解題を付して、総覧・日本歴史・日本経済史・東洋経済史・西洋経済史の五部に分類して収録したもので、巻末には誌名一覧・書名索引を載せている。刊行は年1回で、日本評論社の発行である。

創刊(昭和8年・日本経済史研究所編)以来継続して刊行されているが、本研究所では昭和34年以後これを継承して今日に至っている。既刊は昭和47年版(昭和48年1月刊)までである。

- 刊行 年1回
 大きさ B6判
 頁数 平均320頁
 価格 3,000円
 発行所 日本評論社(但し最近年分以外は品切れ)
 大阪経済大学日本経済史研究所

49年度入試要項

1. 学部・学科および定員

1部	経済学部	経済学科	400名
	経営学部	経営学科	400名
2部	経済学部	経済学科	100名
	経営学部	経営学科	100名

2. 試験日・試験地(1・2部共)

学部	試験日	試験地
経済	2月16日(土)	大阪・金沢・名古屋・姫路
経営	2月17日(日)	広島・高松・福岡・鹿児島

3. 試験科目・時間(1・2部共)

学部	科目	備考	配点(計500点)	試験時間
経済学部	英語	英語 B	200	80分
経営学部 (1・2部共)	国語	現代国語 古典乙1(但し古文のみ)	150	70分
	社会(1科目選)	倫理・社会・政治・経済 日本史・世界史B、 地理B、商業一般、簿記	150	70分

4. 出願期間・合格発表・入学手続

- ① 出願期間 48年1月21日(月)～2月7日(木) (郵送出願にかぎる)
- ② 合格発表 入試10日後の予定。(学内に掲示した本人に直接通知する)
- ③ 入学手続 合格発表日より10日以内の予定

5. 出願について

- ① 49年度入試要項は、11月10日発行の予定である。
- ② 要項請求先: 大阪市東淀川区大隅通2丁目2番地 本学入試事務室、要項請求にはタテ5cmヨコ12cmの用紙に、住所氏名を横書きし、代金千円共300円(切手可)を同封すること。
- ③ 入学試験要項には経済(1・2部)経営(1・2部)両学部の出願書類がセットしてあるので併願する場合でも1通請求すれば足りる。
但し、出願にあたっては、両学部の出願書類を同封して郵送してもよいが検定料は両学部とも納付しなければならない。

学生数と入学者数

昭和48年5月1日現在

	1年	2年	3年	4年	計
第1経済	833(14)	734(7)	975(8)	1,054(11)	3,596(40)
〃経営	915(27)	860(27)	896(12)	998(6)	3,669(72)
第2経済	166(6)	294(4)	253(7)	356(8)	1,069(25)
〃経営	204(6)	213(4)	174(6)	241(3)	832(19)
計	2,118(53)	2,101(42)	2,298(33)	2,649(28)	9,166(156)

学部	内訳			
	志願者数	受験者数	合格者数	入学者数
第1経済	5,823(99)	4,957(90)	1,392(25)	833(14)
第1経営	5,768(112)	4,878(98)	1,541(40)	915(27)
第2経済	642(22)	522(17)	254(9)	166(6)
第2経営	506(20)	408(11)	255(7)	204(6)
計	12,739(253)	10,765(216)	3,432(81)	2,118(53)

()は女子

例年、来年度の入試要項と現在の学生数、本年度の入学者数等を当局から出していただいているが、学生数については、経済、経営の第一学部で七二六五名、うち女子一二二名、第二学部が一九〇一名、うち女子四四名、計九一六六名、うち女子一五六名となり、本年の受験、入学者数は受験者が第一経済、経営で一万一五九一名、第二学部が一一四八名、計一万二七三九名で、そのうち入学者は第一経済、経営が一七四八名、第二学部が三七〇名、計二一一八名となっている。詳細は別表の通り。

また今年度の入学試験に当っては、学園の落着きもあって同窓会からの応援もなく済んだが、一昨年は大学当局の要請もあって、同

学生数と受験・入学者数

窓会をあげて協力をしたこともあった。ただ、地方入試には、各支部の全面的な協力のもと今日でも行われていることは従前通りである。

特に今年からは、鹿児島での入学試験が行われたが、九州支部の深い理解のもと、新しく鹿児島支部が発足、その協力があつたことはいまでもない。これで地方での入学試験場は七都市となり、西日本ではゆるぎない地位を築くことになった。

幸い、入学志願者数も安定し、合格者の内容も年々向上していることはまことに喜ばしいことであるが、なお一層内容の充実のため、同窓生の深い理解とご協力をいただきたいと思います。

大学の質を高めるために 国庫補助を増大せよ

学長 福井孝治

ドイツ語で「アカデミッシュ・フライハイ」といった場合、日本語の「大学の自由」よりも意味が広く、学生が学期毎に甲大から乙大へへと移って自分の希望する教授の教えを受けることの自由が、重要な内容として含まれている。例えばマルクスは、はじめボン大学に学び、のちにベルリン大学へ移っているし、マックス・ウェーバーは、はじめハイデルベルク大学で、のちにはベルリン大学で学んでいる。これは、ドイツが本来多くの小国に分裂していた関係上、わが国とちがって遙かに地方分権的であつて、地方の小都市にも古い伝統とすぐれた教授陣をもつ大学が存在し大学間の格差がなく、大学入学の資格試験が大学別でなくて統一的行なわれ

るといふような事情に依存するものであつて、わが国の現状の下では容易に実現できない事柄であるが、極めて望ましい制度であることは論をまたない。

四三―四年の大学紛争以来大学の機構改革が問題となっているが、大学教育全般を見る時、最も重要な課題は、戦後の教育制度の改革に伴う大学の無難な拡大新設、学生数の激増に、どのように対処するかということであろう。学生数の増加は世界共通の現象であるが、わが国ほど急増した国はない。それは正に戦後のGNPの急増にも匹敵し、問題が起らなかったら却つて不思議である。大学の質を高めるために政府はもっと国庫補助を増大せよ、私はこう叫びたい。

大阪経済大学学園だより

落着きを取りもどした学園

この一年学園は比較的平穩無事だった。ちよつとしたこぜり合いが新聞紙上を賑わしたことはあつたが、大事には至らなかつた。学園から寄せられた原稿も至極簡単。学生数と入試の記事は編集部で書いたものです。

昭和48年4月6日

昭和48年度学部入学式

4月20日

昭和48年度大学院入学式

10月23日

学生部室を学生会館南に新築。鉄

筋コンクリート2階建・部室20室・延396平方米。(10月23日竣工予定)

学内人事

4月1日

新任 橋本不二雄 助手、体育実技

4月1日

経済学部長(再任) 渡辺敬司教授

4月1日

経営学部長(新任) 喜田義雄教授

4月1日

教養部長(新任) 田中健一教授

10月19日

学長選挙実施

役員人事

5月30日

理事(専務理事) 辞任

5月30日

理事 辞任

9月16日

理事 辞任

北里武三教授

浅沼玄應教授

梅田武文教授

叙 勲

4月29日

本法人 色川幸太郎評議員(元最高裁判事 勲一等瑞宝章を授けられる。

今や世界はまったく狭域の世界である。大陸を離れた、日本では、多くの同胞が、あたかも隣の町へでも、買物に行くように、しかも頻りに世界の到るところに、多種、多様の目的で渡航している。それが日本の実状の一面である。これはしも世界経済の中にあって異常にまで発展し得た経済成長の証左の一つでもあろうか、はたまた第一次大戦後のような、俄成金の輩出の勢でもあろうか、あながち、そうとも言えないであろう。このことは、ひとり日本の国民だけではなく、各国の人々もまた諸々の国へ渡航している現状であって、その経済的要因は別としても、最も見逃し難い要因の一つは今日の世界航空科学の急速な発展による結果であらう。しかしながらこれらと関連するもののように、世界の環境もまた各方面にわたって、はかり知れないまで変貌しつつある。

澱江第九号発行にあたって

理事 長 渡 辺 達 好

面をわたって、はかり知れないまで変貌しつつある。一例をあげれば先頃ようやくに、南北ベトナム戦争の火が消えたかと思えば、カンボジア及びその周辺国家の状況は悪化するし、また、中東においては、アラブ国家群とイスラエル国との紛争が、ついに中東戦争にまでエスカレートして今日で三日目となった。果してこの戦火の行方は如何に。まったく予断を許さないのが現状である。

我国では前代未聞の長期国会を終えて、田中総理が、仏、英、独、を訪問して自ら欧州外遊に当

り、今や最後の訪問国ソ聯に足を止め、本日同国主脳と北方領土返還交渉を主題にして会談を進めている。果してその成果は如何にある。国内事情は今や過去十数年の経済成長のひずみを露呈し、公害は日に増し拡大し、その対策は混迷の状態というほかはない。

さて同窓生諸君にはいつもながら、母校のため同窓会のために、いろいろのご配慮と、ご後援をいただき、感謝のほかございません。本年も例年の如く十一月三日に年次同窓会を母校において開くことになりました。何卒多数ご出席下さるよう、お願い致します。また例年同窓会機関誌として発行している澱江も十一月中には発行出来るものと思う。これには常任理事山中編集部長初め部員各位や本部役員諸氏のお骨折りのおかげと、さらには会員多数の玉稿を頂いた賜物と、衷心から感謝申し上げます。終りに全国各地の同窓生諸君の益々ご健勝とご多幸を祈念する次第である。

(十月十日記)

同窓会本部だより

同窓会総会を再び大学で

同窓会総会は、やはり母校の大学キャンパスで、この願いがかなって昨年の総会に大学に帰ってきたのだから、あいにくの雨。参加者数は伸びなかったのは仕方がないとしても、やはり年に一度母校の校門をくぐることはよいことだししみじみ思った。大学祭という、年一度の学園のお祭の中で、ともに遊ぶ一日、今年是非参加して下さい。

雨の中昭和47年度同窓会総会

昭和47年11月3日(祭日) 於 大学キャンパス

十一月三日は晴天であるというところが通説であるのに、どうしたわけか当日は朝から秋冷雨がしとしと降るばかりか、風さえも加って最悪の状態であった。

しかし、久しぶりに大学キャンパスで、それも学生諸君とともに大樟祭を楽しむながらの総会とあって各地から集まって来た同窓生諸君は、受付の十三・十四回卒業生の美しい

先輩あるいは後輩にピンクのリボンをつけてもらって総会場であるC41号教室へ……。

定刻十一時に恒例の同窓会総会は多数の母校の先生方のご臨席をいただいて、渡辺達好同窓会理事長の開会の挨拶に始まり、学長福井孝治先生、理事長田岡壽寿彦先生のお祝いの言葉をいただいた後、祝電が披露されて盛り上がったところで、現在問題になっている「世界通貨と円の再切上げ」というテーマで岩井茂先生よりご講演をいただいた。早速、明日から役に立つことでもあり、あちこちで熱心にメモをとる卒業生連、時間はアツという間に経ってしまった。

学歌、学園歌を一同起立して歌う

昭和四十八年度予算について玉岡総務部長より各項目について説明。

特に、編集費名簿作成との関係について山中編集部長より詳細説明。昭和五十年に新名簿を作成することを承認。

質疑応答なかでも支部費について数支部長より提案あり、審議のうえ満場一致にて可決。

第三号議案
その他
特に審議事項なし。

以上にて議事もどことおりに終了し、別室にて懇談会に入り二十時四十分散会。

最後に、この紙面を借りて協力いただいた卒業生諸君はもろろのことと、大学の各部門の職員の方々に心からお礼を申し述べ次第です。

(理事會)

予算・決算を承認可決

◇昭和四十八年六月三十日(土)午後六時。

◇ニュー・パレス(新阪急ビル)。

◇第一号議案
昭和四十七年度決算

◇第二号議案
昭和四十八年度予算

◇第三号議案
その他

◇出席者 六〇名

。中村監事より監査報告。

第二号議案

声は、外の冷雨をふきとばす勢いであり、同窓生諸君の顔には在学当時のようにほんのりと紅色が返ってきた、満足気に満ちていた。やはり「同じキャンパスで教えを受けた輩」とあるという意識がそうさせたのであろう。

引き続いて、本館三階・四階の懇談会場へ……。あちらこちらで先生を囲み、あるいは同期生が、ゼミ生が弁当をつつきながら尽きせぬ話に花を咲かせていた。刻一刻と時が経ち、ぼつぼつ夕闇が迫るころに、名残をおしみなながら、そして来年の総会での再会を約しながら一人、一人と去ってゆき四十七年の総会は盛會裡に幕を閉じた。

昭和47年度収支決算書

自 昭和47年4月1日 ~ 至 昭和48年3月31日

収入の部		支出の部	
科目	決算額	科目	決算額
前期繰越	253,366	総会費	671,366
会費収入	6,803,200	役員会費	710,380
名簿収入	101,000	支部費	350,500
利息収入	30,390	事務費	1,641,874
総会収入	198,000	編集費	1,202,323
雑収入	6,922	学対費	690,000
		慶弔費	28,000
		借入金返済	1,700,000
		借入金利息	8,609
		雑支出	1,205
		予備費	0
		次期繰越	388,621
合計	7,392,878	合計	7,392,878

昭和48年度収支予算表

自 昭和48年4月1日 ~ 至 昭和49年3月31日

収入の部		支出の部	
科目	予算額	科目	予算額
前期繰越	388,621	総会費	800,000
会費収入	6,800,000	役員会費	800,000
名簿収入	150,000	支部費	500,000
利息収入	30,000	事務費	2,100,000
総会収入	250,000	編集費	2,650,000
		学対費	700,000
		慶弔費	20,000
		予備費	48,621
計	7,618,621	計	7,618,621

同窓会支部だより

支部総会も各地で活発に

いまや、支部の数は全国で二十二、年々底辺は広がって、支部活動もいっそう活発になってきていることは、まことによろこばしい。寄せられた原稿の数は少なかつたが、支部総会は各地で開かれ、年々盛大になっている。移動があれば、必ず別掲の支部長さんまで連絡、支部の集りにはどんどん参加していただきたい。

東海支部

秋風が身にしむ頃になると、同窓会の動きが活発になります。忘年会をかね、懐しい同窓生が一堂に集まるチャンスが多くなるためでしょう。そして一年は早いもんだなあ：なんて、感慨も飛び出したりします。

東京と大阪に挟まれた名古屋、大都市としてはまあおのんびりした、静かな都会なのですが、この一年、ちよいとした事件がもたらがりました。



高速道路建設中止による、巨大な残ガイ

その一つは今春革新陣営から選ばれた本山市長が、騒音など公害苦情で突然、高速道路の建設中止を発表したことです。五年がかりで建設中の足ゲタなど一連の都市計画事業を急にやめるといふわけですから、騒音が大きくなるのは当然です。住民の納得なしで高速道路建設は行なわれない」という公約が尾を引いたものですが、これまでの投資額がなんと、一八五億円。

結局、名古屋市が税金などでこれを肩がわりすることになりそうですが、巨大な残ガイを目前にして、市民は「モツタイナイ」と複雑な表情です。

もう一つは地元の野球ファンから熱狂的な支持をうけている中日ドラゴンズの本拠「中日スタジアム」が、これも一三〇億円にのぼる借財で倒産したことです。社長の入水自殺で、原因はもう一つははっきりしません。が、当時の開発局長であったK氏が土地ブームで、買収について勇み足、これには本人の私利私慾による詐欺行為もからんで、雪ダルマ式に借財がふくれ上がった、というのが当局の捜査報告です。

京都支部

たまたま中日新聞社が親社会的存在（実際は一〇〇程度の株主）だったため、地元経済界に少なからぬセンセーションを巻き起こしました。これはさる九日に開かれた債権者会議で、とりあえず「中日球場の灯は来季も消さぬ」との方針が打ち出され、まずは一件落着となりました。

年末に予定されている支部総会では、こんな話題も「一年は早いもんだなあ」という語り草の一つになることでしょう。

（東海支部長・加藤正秋）

神戸支部

四十八年度支部総会は六月二日、大楠公ゆかりの淡川神社境内にある楠公会館において開催されました。参加人員長島支部長以下四十名。母校より藤原先生、本部より渡辺理事長、比企事務局長を迎えて盛大に催されました。久しぶりの同窓生諸兄の和気あいあいたる雰囲気の中に、同じ母校より育った者同士の固い結束を改めて感じさせられました。席上長島支部長より支部長交替の提案が出され、長島支部長推薦により、田中義一氏（第十回）が全会一致で支部長に選任されました。新支部長

（京都支部長・木下隆徳）

告下さるようお願いいたします。

（岡山支部長・大森喜太志）

九州支部

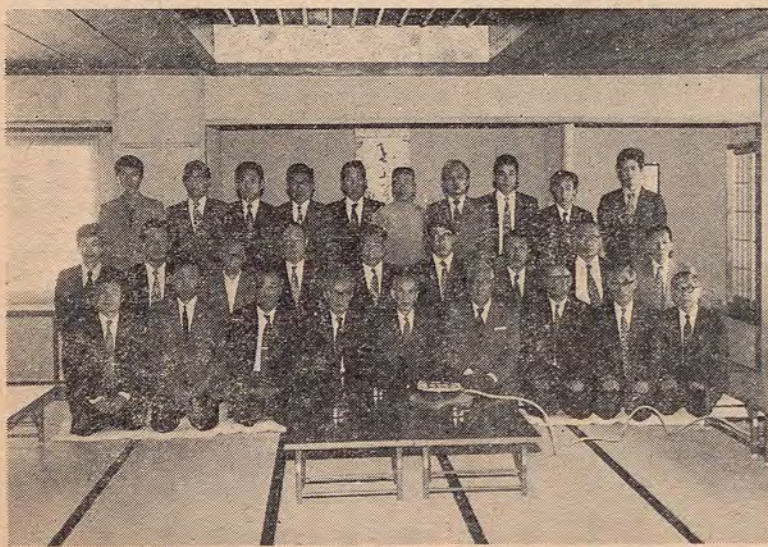
福岡市では、ことしも経大の出張入学試験が行なわれた。この出張入試が始まって、もう十年以上にもなるが、毎年お手伝いにかけているけれども、福岡の場合をちょっとご紹介しよう。試験は本学と同日、各地いっせいに二月十六・十七日の二日間行なわれたわけだが、福岡の試験場は新築したばかりの水城学園という予備校。さて受験者数だが、経済学部が二百一十一名、経営学部百四十七名。いずれも一部二部とも合計した数で、総計は三百五十八名。地方では姫路、高松について、福岡は

誕生二十七名で仲々盛んでした。ただ、今回は出席者数が少ないのが淋しい感じでしたが、しかし本当に同窓会の意気に感じて出席して下さいな人はかりだったので母校の話、在学当時の失敗談、或は最近の母校の現況等に時間を忘れて話に花が咲いた事は、世話人として嬉しいかぎりでした。

岡山も新幹線開通以来、阪神との交流がひんぱんになり、先般は駅前至高島屋の進出を見て何か母校その物も非常に身近かに感じるようになりました。岡山支部の同窓生も恐らく阪神方面への往来が繁しくなった事と思います。一寸、足を延ばして母校を訪ねて見る事もまた、青春時代の思い出として良いものではないでしょうか。そして岡山支部総会の席上で色々と母校の思い出話や、母校の発展に努力するよう心掛けて貰いたいものです。

来年度の支部総会には充分準備して多数の同窓生諸君が、喜んで出席して頂けるようがんばりますので、支部諸兄も宜しくご協力願います。

なお三十七回三十八回卒の在岡の方で住所、勤務先等支部にご報告のない方は、至急ご報



岡山支部総会から

姫路支部

結成二十五周年を迎えて

姫路支部が結成されたのは戦後間もない昭和二十三年一月十八日。當時は戦災後間もなく、また満足な場所もなく、やっと戦災を免れた場所です。一堂に会するもの約二〇名足らずで、故黒正巖博士も列席され盛大裡に支部が結成されたように記憶している。その後、毎年一回乃至は二回程度の定期的会合をもち約二十有余年続いた。その後役員の変更、若返り等により一応支部の陣容を整え、協議を重ね出張入試の協力等を経てその地盤の確保に微力ながら全力を

岡山支部

一九七三、八、三十一記

支部長 永川仁（一六回）
副支部長 柳内 明（五回）
会計幹事 福永好文（二十九回）
幹事 長谷川孝（二十二回）
幹事 米田泰造（二十二回）
以上

注いできた。爾来会員も逐年加速度的に増加し、これが把握には困難を極め相当のエネルギーを費し名簿の整備に時間と努力を費したが、やっとこの八月末に最近に於ける支部の名簿も出来あがり整備することが出来た。支部員の概数は約四〇〇名位であるが毎年相当数増加している現状で「数は力なり、若さは力なり」で気強い限りである。そこで役員等とはかり支部結成二十五周年記念大会を何時、如何なる方法でやるかを検討し連絡するつもりをしているので、その時には多数出席されることを今から期待している。右に關し適当なアイデアがあればどしどしと左記役員へお知らせを乞う。

岡山支部

岡山支部も昭和四十七年度は支部長私事の雑事多く支部総会を開催できず、同窓生諸兄に誠に申し訳なく思っております。故黒正先生の故郷の岡山支部も、第三十八回卒業生を加えて遂に五百名を越す多数になったことは誠に嬉しいことです。

昭和四十八年度支部総会は五月六日午前十一時より岡山駅前の県市町村職員共済組合「桃花源」で開催しました。本部より浅沼教授、地元から近藤講師のご来賓を得て、出席同

三番目に多いことになっている。全学では受験者総数は一万二千七百三十九名で、昨年の一万三千九百三十名に比べると、一千九百九十一人の減となるが、九州の場合は、受験地の福岡・鹿児島のみならず、毎年おおむね五百名程度が受験しており、ここ数年この五百名という数字は、コンスタントに定着しているかのようだが、九州地区の伸び率は、いますこし高まっていいのではなからうか。九州支部としても、いろいろとPRなどに努めているが、同窓会諸兄のいっそうのご協力をねがう次第。

さて、そういうことで九州支部総会は、この出張入試が終った二日目に、こしも二月十七日、福岡市の博多・中洲お座敷酒蔵「たしろ」で開いた。このお店はささやかな小料理店だが、ママの好意で店全体を

福井支部

地方で見る母校、大経大

誰しもわが母校のこととなると良成程、小田さんは下関の繁華街に料理屋、キャバレー、パチンコ屋等々を経営する第一商会の社長さん。下関では大変な名士だった。その時も、随分お世話になった。支部総会の二次会はキャバレーで、三次会は料理屋で、小田さんの負担も大変だったと思う。その間、大洋漁業をやめられて、奥さんと始められた大衆食堂からの出発という苦労話もお聞きしたが、その当時から、肝臓を患らっておられて、禁酒中とのこと、やはりこれが命とりになったとき。

前山口支部長 小田氏を偲ぶ

「ご苦労さん、どのタクシーでもいいから丸山町の小田とってきて下さい。」
「丸山町のどの辺ですか」
「いえばかりです」
半信半疑、タクシーに乗って
「丸山町の小田さん」
「ハイ、わかりました」
「小田さんだけでわかるんですか」
「それや小田さんは夜の下関の市長さんですたい」
ということだった。

支部にとつてはかけがえのない人を失ったことになる。心からご冥福をお祈り申し上げる次第である。(松本記)

同窓会支部役員

東京支部	支部長	服部 友一
東海		加藤 正秋
滋賀		野田 邦弘
京都		木下 隆徳
丹有		梶村 文弥
神戸		田中 義一
和歌山		松本 旬弘
岡山		大森 喜太志
広島		佐々木 一義
山口		串田 一
高松		矢野 保郎
徳島		谷 俊一郎
高知		横田 憲介
九州		荒牧 博之
石川		石地与四太郎
福井		内田 甫
富山		重松 尚
三重		水上 敏夫
西宮		増田 憲治
大阪市役所支部		村上 静夫
岐阜		丹羽 好輝

いこと、悪いこと、何かにつけ関心が持たれ、また色々と気をくばることが多いものです。特に活字となって表われたものについては、また格別の感があるものです。以下は七月十二日、朝日新聞福井版に掲載された一つの記事です。

郷土資料を再び故郷に 県立図書館「全国に散らばった郷土資料を故郷に呼び戻そう」という郷土史研究家の長年の声をかなえるため、県立図書館は七月下旬ごろから大阪経済大学図書館に所蔵されている明治の自由民権運動の斗士、杉田定一の資料「杉田文庫」のマイクロフィルム撮影に取りかかる。

「杉田文庫」は嘉永四年(一八五一年)に、坂井郡波寄村(現在の福井市波寄町)に生まれた杉田定一が、板垣退助らと共に自由民権運動に取り組んだころの政治資料や、近世村方文書など、約五万ページにおよぶ貴重な資料が収められている。昭和四年、杉田定一の死後、親類が保管していたが、三十年大阪経済大学に引き取られ、県外へ流出してしまつた。

マイクロフィルム撮影は、このほど同大学の協力が得られ、大経大図書館職員一人と専門の学者の手で進められるが、文書類などの資料が、紙がくっついて離れなかったり、虫

などをお聞きしながら、なごやかな楽しいひとときを過ぎ、盛会の中に幕を閉じました。会員数八十余名の大世帯、年々総会の時期になりますと会場選定にうれしい悲鳴をあげるという一コマも出ています。

明年は満二十五周年を記念して総会もいささか趣向を変え、記念の年にふさわしいものにしたいと考えています。

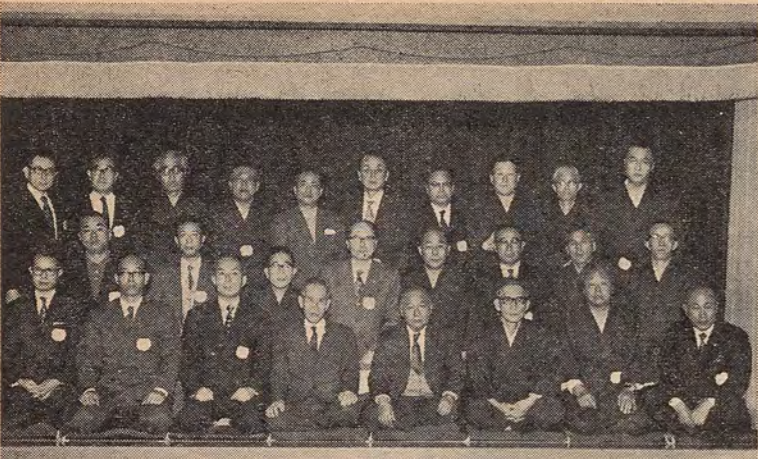
この原稿を書きながら経大の前身などをお聞きしながら、なごやかな楽しいひとときを過ぎ、盛会の中に幕を閉じました。会員数八十余名の大世帯、年々総会の時期になりますと会場選定にうれしい悲鳴をあげるという一コマも出ています。

幹事として痛感したことは、幹事でない方のご協力の大きさであった。全国に散らばっておる同窓の方々を一つの目的に凝集することは至難なことであると痛感した。

出席者こそ少なかったが、宝塚温泉の大広間でひとりひとりに醸されたあの雰囲気は、人数の少なさを補って尚余りあるものがあった。三十年余あれから経っている。従って、一堂に会しても面影すら定かでない人もいる。それでも肩を擁し盃をめぐらし、互いに語り合うのは戦争をくり抜けて来た酷しさへの回旧であり、また子弟の教育、第二の人生計画等、つまり人間生きるための営々たる苦勞の分ち合い、いたわり合いではなかったか。

同窓とはここに意義がある。利害はなくあるのは愛情である。宴はめぐり果てることなく、武庫川に映ずる灯も絶えはしない。友情も亦同様である。(石森哲雄記)

(写真は会場から)



第八回生のつどい

とき 昭和四十八年二月十一日
ところ 宝塚温泉紫雲荘
同窓会のレポート提出方前幹事

食いでかなり傷んでいるという。全部で約二万五千コマのフィルムに収めるが、傷んで読みにくい部分が多いため、作業がいつごろ終るのかまだメドはたっていない。
(福井支部長・内田 甫)

二十五周年を迎えることになります。今更ながら月日のたつのが早いという実感とともに、ここまで育ち発展してきた支部の歴史と伝統に更にもがきかけ次代に引き継ぐため、役員一同責任を痛感している次第です。

本年の支部総会は二月八日大阪市役所職員寮で開催いたしました。母校から藤原先生、同窓会本部から比企事務局長をお迎えして母校の近況

より申受けてから、既に半年以上経った。此の種作業は丁度夏休みの宿題みたいなもので、仲々ペンを走らせないものである。その根本にはレポートの常道的書き方、つまり何時何処で、何人集まって、どうだった、と言った所謂型にはまったような書き方をこの際、打ち破ってみたいとあれこれ画策したからである。で、この画策が成功したかという残念ながら駄目だ。どうしたって型にはまってしまうのは残念であるが致し方ない。一四四通案内を出した。そして出席者は三名、教授三名計二六名である。出席率は従って一六%の低調であった。しかも此の案内状のうち住所不明で戻って来たのが三〇通近く、これはとにかくとして、全く返事のないのが四〇数通の多きに達している。各人が友の消息を知りたく思うのは人情であらうに一片の返事すら寄越さないのはどうした訳か。返事を頂

であります昭和高校の学生時代が昨日の出来事のように眼前にうかんできます。特に偉大な学者であり教育者黒正蔵校長のお姿は勿論のこと、声まではっきりと聞こえてくるような気がいたします。童顔に慈愛に満ちた眼差し、昭和高校創設のため私財の殆んどを投じながらも一言も発表されなかった先生。雄弁でもなく、じゅんじゅんと説き聞かすということもなく、ただ可愛い学生のためならいつでもこの身を犠牲にしてやるという、知行合一の精神が全身に漲っていたことが思い出されます。言葉にして言われなくとも以心伝心、学生の心にも先生の精神が深く根強く植えつけられていました。従って当時の学生の間には黒正先生のためならという自然発生的な強固な団結がいつとなしに芽生えていたことは事実であります。これが昭和高校スピリットとして官公立の学生に一步もひけをとるものかという感慨となり、校章に大いなる誇りを持っていたものです。黒正先生のお声が再び聞けるものなら現在の学園、学生諸君にどのような話しかけをされるものかと、つくづく感ずる次第であります。

いろいろと書きたいこともありませんが、紙面に制限もあり次の機会に譲ることといたしまして、まことに簡単ですが、支部近況と懐旧の一端を述べさせていただきます。

終りにわが大阪経済大学同窓会ならびに各支部のご発展と、会員皆様のご多幸とご活躍を心から願いたしますとともに、母校のますますの繁栄を祈ってやまないものであります。(大阪市役所支部長・村上静夫)

最近の学生生活について

授業・ゼミ・クラブ活動・アルバイト

長らく続けてきた卒業生の口づてに伝える学園史「あのころのこと」も、前回で終わった。それぞれに時代を反映して、起伏の多い、楽しい読みものだった。この間のお話しをおききしたのが、前後六回にわけて、第三十四回卒業生まで、その後、今年の卒業生が三十九回というから、五年の才月を経過したことになる。いまから五年前ということになると、まだまだ記憶に新しい。そこで、今回は、今日の問題として、新しい角度から、最近の大学のあり方、学生生活といったものについて話していただくことにした。

より深い人間関係を

本題に入る前に少しお断りしておかねばならないことがある。最近の学園が年々マンモス化して、一学年の学生数が一部、二部合わせると二千人近くもなっていることは先刻ご承知のことと思う。これにともない弊害は随所にあられ、そのことが今日の話しの中の中心課題にもなるわけだが、これはあとにゆずるとして、さて、この五回にわたる卒業生の中で代表に出ていただく段になってハタと困った。前回まではだいたい同窓会の理事の方々にお集り願って来たのだが三十六回以降となると、それも無い。同窓会本部は各回三名の代表(理事)からなっていて、予算、決算をはじめ、重要案件はすべてここで審議承認されるわけだが、ここの代表が誰も出ていないということは組織の上からも重大な問題である。この選出の方法等の模索も今日の会をもったねらいでもあったわけだが、いまはそんなこともいっておれない。そこで、取りあえず、本学卒業生で大学院在学中の

マスプロ化の弊害

教育のマスプロ化は、いまにはじまったことではない。戦後大学教育の著しい傾向だし、本学にもその弊害を責めるのは酷かも知れない。しかし、それがために全学をおおっくう沈滞したムードはどうだろう。活気がないし、覇気がない。なるほど体育館からは気合の入ったかけ声もきかれるし、グラウンドやそここの芝生の上での躍動もある。時には学生運動の尖端をゆくアジテーターの単調な呼びかけもある。しかし、何かそれらはそれだけに終って全体的な盛り上げに乏しい。

低調さを、まず身をもって感ずるのは授業である。教授は単々としゃべり、学生はもくもくと写す。昔からのありきたりのパターンかも知れないが、熱気がないのも事実。教授

からの指名もなければ、学生からの質問もない。先輩からは昔の授業は活気があった、教授からの指名もあったし、わからないところは、どんな学生も質問をしたという。そのためには予習、復習は欠かせなかったし、時には教授を立往生させたこともあったという。こんなことは、現在の授業の中ではまずあり得ない。何故だろう。たしかに、専門学校の授業と、大学の授業は比較にならない。しかし、大学へ昇格した当時は、まだ白熱したやりとりはあったという。専門学校の延長と云ってしまえば、それまでだが、当時の話をききながら、本質的に違ふと思うのは、やはり学生数の違いである。

当時の学生数は学年で、三、四百人、いまは二千人もいるのである。三百人そこそこでは、学生相互の競争意識もあるだろうし、教授とのコミュニケーションもそれなりに深い。やろうと思えば、どんな質問だってやれるだろう。ところが、いまは何百人と入る階段教室で、意識もない連中が授業を受けるのである。教授との結び付きも薄い。指名も質問もないのは当然のなりゆきかも知れない。

しかし、だからといって、この状態がいつまでも続いてよいというものではない。やはり相互に励み合えば熱も出てくるだろう。特に学生側に、それだけの意欲が芽生えれば、教授は絶対にこたえてくれる。まず要求されることは、学生が学生の本分に立かえて、真摯に学問の道に励むことである。

幸いに立派な図書館もあることである。この利用などは大いに考えてもらいたい。いついっても同じ顔ぶれであるのは残念だが、これが狭す

る、これも大学の使命の一つであるはずである。

こうした肝心のことが置き忘れられては、実は困るのである。いってみれば、これがマンモス化の一番の弊害でもある。

これを解決するには、学生を減らすか、教授を増やすか、そのどちらかを選ばねばならない。経営の問題もある。教授を増やすともなればもちろん給与の問題もある。いずれも授業料の値上げにつながる。これはど学生運動の激しい時代に安易に授業料を上げることは問題である。

しかし、さりとてこれをさけて通ったのでは問題の解決にはならない。本質を見極めて、よい教授を多く迎え、授業の内容を高め、師弟のふれ合いをもっと密接なものにしてもらいたい。

これはわれわれの切実な願いである。と同時に、教授からの学生への働きかけもより積極的であってほしい。熱のある講義には学生の出席率も非常によい。教授のやる気は、自然に学生は肌で感ずるものである。紛争の時でも、真正面からこれに取り組んだ先生は何人いたろう。あの異状事態の中で、それを望むのは無理かも知れないが、事なかれ主義というか、それをさけて通ろうという先生があまりにも多かつたことか。



写真は上、掲示板前で 下、芝生の上での歓談

きて、増築に増築を重ねるようになっては、まずいことではない。中には卒業するまで、一度も図書館の利用にあずからない学生があるときくが残念なことだと思う。

ゼミナールのこと

授業が大人気で活気に乏しいのはわかるとして、それでは比較的少数で専門の分野を勉強するゼミナールの現状はどうだろう。ここでも、上々という答えははねかえってこない。程度の差こそあれ、おおむね低調の域を出ないという。

少数といっても現状は、五〇人、六〇人を抱えるゼミも少くない。これだけの人数を一堂に集め個々に指

導するとなると教授も大変だろう。しかし、ゼミを受ける学生はまだよい。中にはこのゼミからもはみ出しているというから驚きである。こうした学生は余分の単位が与えられ、これを取る卒業が出来るのだという。なんとも無味乾燥な感じがしないでもない。

こうした学生は、教授とのふれ合いはいったいどうなっているのだろうか。少くとも大学は、学問の府であることは当然としても、また一面人間教育の場であることは言をまたない。師弟の交流、学生同士の友情交換が、どれだけ人格を高め、人間としての視野を広め、人間味を増すこ

とか、いうまでもないことである。

今日の小、中、高等学校を通じての大学入試を自虐とした教育が批判されるのも、またこの点にある。

人間性を無視した、苛酷なまでの入試のための勉強、人よりも一歩先に、人よりも少しでもよい大学に人よりもさらによい就職口を、と血まなこになって肉体に打ち打ってきた学生、その学生が大学の門をくぐったと同時にほととずるのも無理からぬところだが、そこにあるのは、ギスギスした人間でしかない。これに友情を注ぎ、教授との人間的なふれ合いの中に真の人間味を与え、豊かな学問という血を通して、一回りも二回りも大きい人間に育てあげ

雨降って地固るといふ。いまこそ教授も学生も、古い沈滞した空気を打ち破って、新しい経大をつくり出してほしい。要はやる気だと思ふ。

学生も現状に甘えてはいけな。入学したからには、いつかは卒業出来るんだという安易な考えは捨てて、この四年の大学生活の中で学問的にも何かをつかんでほしいと思ふ。そのためには単位の取得や、卒論などはもっときびしくあつてもいいと思う。変なファミリー的感覚で、時が来れば卒業出来るというのでは、大学の意味が無いではないか。入る時は小々門戸を開いても、進級や卒業はもっときびしく、それだけ価値のある学生を社会に送り出してほしいと思ふ。これがまた経大の名を高からしめる道だと思ふ。

その上になお望むならば、大学として何かの特色がほしい。卒業生の就職先が中堅企業にあるとするならば、中小企業問題ではオーソリテイになる位の研究態勢があつていいではないか、昔のように支那経済研究所が一つの特色であつたというのなら、新しい市場、中国を取り上げて、これに重点を置いた研究所や講座を開いてもよいではないか、何か経大でなくてはといったものがほしいと思ふ。

クラブ活動のこと

学問のことは、これくらいにしてクラブ活動や娯楽、アルバイトといった面にもふれておこう。

クラブ活動が盛んであることは、いうまでもない。体育会系でも、各クラブの活躍は目覚しく、一部リーグで良い成績を収めて新聞紙上を賑わしているものも多いし、新聞に出

ないまでも、日常のきびしい鍛錬に耐えぬいている学生も多い。

また一方では、学術会系、芸術会系と地味な中にも、着々と成果を収めているクラブも多い。

しかし、数十もあるこのクラブや同好会に参加している学生数は、たいどれ位になるだろう。半分とまではいかない。

では、残りの人達はどうかだろう。こうしたクラブにも参加せず、授業の方は前述の通りとすると、あとは何とも味けないではないか。

中には大学のクラブに参加せず趣味だけで、地域のサークルや、友人達のサークルに参加している者もあるときが、せめて大学に入ったからにはクラブに入って自らを練磨し、自ら何かをつかもうとする努力はほしいと思ふ。

さてアルバイトのことはあとで述べるとして、クラブにも参加せず、限られた授業の終つたあと、残りの学生はどんな生活を送っているのだろうか。

趣味、娯楽といった中で圧倒的に多いのが麻雀。学園の周辺に麻雀屋の看板が目立つ今日此頃である。大学に來て余暇を埋めるために麻雀を覚える者も多い。覚えたての麻雀は一種麻薬に通ずるものがある、なかなか断ち切れることはむずかしいが、これに埋没する学生生活はほめられたものではない。

その他、競馬、パチンコといったギャンブルが人気のあるのは、どことも同じ、特に競馬熱は社会一般と同様に加熱気味、学園の中で競馬の予想新聞が巾をきかせる時代である。

しかし、これとても身上をつぶすところまではいかない。あくまで趣

味と実益。

でも、こうしたところでも、友情は芽生える。クラブ活動での人間の結びつきはいうまでもないが、こうした遊びの中での友情も捨てがたい。昔から悪友には悪友の良さがあるといふ。そういう意味で遊びもまったく無意味ではない。

アルバイトについて

アルバイトは、いまや学生の中に定着したかに見える。学生生活四年間を通じてアルバイト皆無というのはまれだろう。

ただ、いまのアルバイトが昔と違うのは、生活のためという切実感がうすれたことではないだろうか。

中には、アルバイトによって生活から学費まで一切をまかなっている学生ももちろんいる。数からいえば学生の総体数も増えたこともあつてむしろ増えているかも知れない。

しかし、アルバイトが学生生活の中で日常化した中では、これがあまり目だたなくなつた。

そのアルバイトの目的も多種多様な学費一切といったものや、学費のたしにといった殊勝なものから、小遣のたしに、娯楽費の捻出にと欲ばつたものもある。

こうした中で、最近特に増えてきたのが、クラブ費の補充のためのクラブごとのアルバイトや、旅費の積立てのためのアルバイトである。

大学というところは、ご承知のように春、夏、冬と休みは長い。そのため体育会系では合宿があつたり、遠征があつたりする。学術会系や芸術会系、応援団などにも研究旅行や、研習会がある。こうしたものへの入用も馬鹿にならない。部費はもとより少い。そうならばその不足分をア

この原稿は、左記の方々にお集りいただき、いろいろとお話を聞きした中からまとめたものです。

- 稲福 善男氏
- 渡辺 忠司氏
- 杉本 光雄氏
- 鹿島 重信氏
- 前田 増蔵氏
- 比企 重氏
- 山本編集部長

アルバイトで稼ぎ出そうということになる。そのための集団アルバイトも一つの流行である。

一方の旅行の積立でも、年々贅沢になって最近では海外旅行というデラックス版も出てきた。地球が狭くなったというのか、ここにも経済大国の影響があるのか、学生の渡航熱も盛んである。もちろん、悪いことではない、まことに結構なことである。

若い時分に海外に目を開き、貴重な経験を積むことは、将来に何かとプラスになる。単なる物見遊山でなく、その上に何か目的をもつていくということになるというところは、ない。こうした海外旅行をアルバイトの積立てでやれる時代になったのだから、いまの学生は幸いである。

海外旅行といかないまでも、国内旅行の方も盛んである。国を上げてのレジャー時代、こうしたムードの中で学生の旅行が続くのももつともなことだが、この費用をアルバイトで稼ぐ、考えてみれば、よき時代といえる。

同窓会への注文

さて、同窓会への注文となると、院生ということもあつて、まだ同窓生という意識は少ない。しかし、年

いし、若者向きの余興もあつてもいいのではないかと。本部総会が学園に返ってきたことは、こういった意味では大変よろこばしい。同窓会総会というよりは、大学にむしろなつかしさがある。年一度大学キャンパスを訪れ、後輩ともども大樟祭をたのしみ、これにより魅力を感じるのも事実である。

いろいろと、いいたいことをいったが悪からず。われわれも追い追ひ同窓会になじんでいくことだろうが、温い抱擁力とご指導の程を心からお願ひしたいと思ふ。

(文責 編集部)

代を経るに従つて、学生生活をなつかしみ、学園により親しみを感ずるようになることもまた事実であるところ、提起された理事の選出ということになると、なかなかむずかしい。三百人の中の三人と、二千人中の三人では母体も違えば内容もまったく違ふ。学生同志のコミニケーションは、先程から出ていたゼミの友達か、クラブの友達かそれとも遊びの中での友達といったものに限られ、広く一般にはない。自治会もある。しかし、実体はご承知の通りである。こうした中で三名

このまえ新聞にでていたのだけれども、これからの大学教育のデザインづくりを進めている文部省の高等教育懇談会で報告された「最終見解」というものを読んでみた。そのレポートによると、①昭和六十年代の大学や短大の進学率を、現在の28%より、10%高くなることを想定して、その受け入れ措置を講ずる。②大学の都市集中を抑制し、これからの大学の拡充は、地方中心に進め、とくに公立大学を増設する。③私学の助成も一般助成のほか、あつたに各私学の特質にに応じたものを取り入れる。……以上三点のうち、いちばん経大に関連のあるのは、私学助成を各私学の特質に応じたものを受け入れるというところだろう。また今後、進学率が高くなることは、たいへんよいことだけれども、それなりに大学の中身ももっと高くなってほしいと思ふ。大学の中身をよくするためには、「人」と「物」とを整えることに

を選べというのには酷である。でも、代表がいけないというのは、いかにもまずい。便法としては、ゼミ単位の回り持ち、或いは体育、学術、芸術の代表を、或いは経済、経営の一、二部から一名づつといった具合で考え方はいろいろある。その辺は同窓会本部とよく話合つてきめてもらえればありがたい。ただ、代表三名というのはどうだろう。三名が五名であつてもどうということはないかも知れないが、組織の上からは卒業数に合せて多少増やすべきではないだろうか。将来、増々底辺は拡がっていくが、その一人々々の把握は

なるうかと思ふが、これまでの入試制度にしても、そして教授会の在り方にしても、十年一日同じようなやり方から脱けだして、ここでひとつ考えなおしてはどうだろうか。中国でいま学校の試験制度のあり方に疑問がもたれ、大きな反省期に入つていて、西日本新聞の特派員は伝えているが、それによると「文化大革命後の北京

ある老学徒の夢

ちかごろの北京大学から

六回 荒 牧 博 之

大学の入試制度の改革について、つぎのようにレポートしている。つまり文革以前は、北京大学でもちょうど日本の試験制度と同じように、頭のよい連中だけが入学する仕組みになっていた。ところがこれが批判されて、いまは初級中学、高級中学の合計四年間の教育をうけた生徒は、卒業と同時に全員、人民公社や工場で働く。そ

ここで二年以上の労働をしたあと、ふまえて、代表の選出には柔軟さがほしいと思ふ。また、本部総会、支部総会にしても、もっと若さを受け入れる趣向がほしい。とかく総会はオールドボールの集りになりがちである。これは当然だし、どこの同窓会でも同じである。しかし、若い世代を入れていくとすれば、一工夫も二工夫もあつていい。たとえば会費にしても社会的な地位も出来、経済的にゆとりが出てきた年代と、われわれピーピーをいっしょにしてもらつては困る。会費の段階制も考えてもらいた

こで二年以上の労働をしたあと、その職場の大衆討議で、推薦を受けたものだけが大学の受験資格を与えられる。大学の試験も簡単な試験を行なつて、大半を入学させるように変わってきたが、最近の人民日報は、こんな試験のやり方では、ガリ勉組に独占されてしまつて、白紙答案をだした一青年の手記を大きく報道している。これは単に入学試験にとどまらず、中学などの平常試験にも反省のノロシがあがつている。北京大学には二千二百人の教授がいるが、常時百人単位で社会人となつた人間が、さらに教育を受ける幹部学校に入り、農民の指導で一年間、農業労働に従事するようになっていく。これからみると、いまの日本の大学の教授内容は、まことに旧

体依然といつたら言いすぎになるだろう。なにも北京大学の生き方だけが、オールマイティではないけれども、人間の進歩とか、文明の進化とかいうものは、前向きな考え方や進み方があつて、始めてそのような築き上げができあがつてゆくのではなからうか。経大もいまこそ、官学にできない私学の特質を生かして、ほんとうの個性豊かな知識人やすぐれた社会人を、たくさん生みだしてほしいと思ふ。昭和商のころの学歌に：知識の糧の広野原……という歌詞が、三十数年たつたいまでも、口ずまされてくるけれども、いま大阪経大のなかには、そういったすぐれた思想、純粋な力ある生き方、愛にみちた人間性……そんな生き方をする人でみなぎつていて、みちみちているといった学園になるのは、いつの日のことだろうか。一老学徒の単なる夢に終つてはならないと思ふ。

(西日本新聞編集局特信部長)

前号から「ゼミの集い」欄を設けましたので大いに活用してください。

今回は、現在、大阪経済大学でゼミナールを担当されている六十八名の先生がたにおたずねしたうちお返事をいただいたものを集録したものです。

〔参考までに、事務局より六十八名のゼミ〕担当の先生におたずねいたしました事項は、

一、最近ゼミナールOB会を開催されたことがござ

ゼミ短信

いますか。されました時はその世話役に原稿を提出するようお願いして下さい。

二、先生の近況につきまして卒業生に一言お知らせ下さい。

三、その他雑感、随想などございましたら「寄稿下さい」。

(事務局・アイウエオ順)

井上ゼミ

井上 清先生

(近況)

井上ゼミナール出身の皆さんお元気ですか。小生の本学勤務も二十六年の永きにわたり、その間、大過なく勤務しえたことを喜んでいますが、現在も元気に、企業形態論・工業経済論の講義とゼミナールの指導に当たっています。六月一日からは図書館長として一層責任が重くなりました。五月二十二日には清寿会(井上ゼミOB会)東京支部総会、六月十日には兵庫支部結成集會に出席し、久しぶりなつかしいOB諸君と語り合うことができました。今後共、清寿会の一層の発展、組織の拡大・結集を計り、懇親を深めてゆきたいと念願していますので未結集の方は住所をお知らせ下さい。

稲原ゼミ

稲原康雄先生

一、OB会は未だ開いておりません。第一九回生国頭利雄氏から後輩名簿を送るようお願いしています。が次の事情で……。

二、春以来、公的には学部長の補佐をおおせつかり、私的には母が骨折で入院、家内がリュウマチで臥床。そんなイライラも手伝ってか、最近恐ろしい目に遭いました。そ

岩井ゼミ

岩井 茂先生

他の先生方は緊密にご連絡のようですが、私のゼミはどういうものか前後の連絡が不充分にて、記事になるようなことがございせんので不悪ご諒承下さい。

大槻ゼミ

大槻 弘先生

ゼミのOB諸君、お元気ですか。このところ小生も人間ドックで体の調子を整えるという具合で、無理は禁物の圏内に入ったようです。しかし、学内の情勢がおもむく流れに掉させず、只今、学生部長の席を暖めたり、冷やしたり、いろいろ走り回らなければならぬ日常です。お互いに忙殺される昨今ですが、一度ゆっくり盃を傾けながら話し合いたいものです。

喜田ゼミ

喜田義雄先生

私も本学に在職して既に二十余年になりましたが、残念ながらこれという業績もなく、徒らに歳をとるばかりですが、おかげさまで元気で精進しています。しかし寄る歳波です。で目下自分の健康管理のため「真向法」をやってみようか停年まで頑張っていきたいと思っています。永

竹林ゼミ

竹林祐吉先生

一、最近ゼミナールOB会を開催しておりません。

二、経大に勤務するようになってから知らない間に四年経過しました。年毎にゼミ生が増加するのを楽しんでおりますが、半面充分お世話できないのは遺憾です。

ととき、府、市、労働組合、経営者団体等の依頼で労働大学はじめ各種の労働講座(講演)を大阪を中心にやっております。ゼミナールOBの諸君に復習のつもりでお暇の節ご聴講いただき、ご忠告をいただければ幸いです。

竹林ゼミ

竹林庄太郎先生

何とか元気で、相変わらずポラントリ・チェーン石仏で明け暮れています。第二回石仏写真展も計画中。

一、なし。

二、ようやく健康をとりもどしつつあり、仕事も昨年頃から若干軌道に乗ってきました。あと一二年の辛抱と思っております。

ゼミナールの指導を「中小企業診断士」受験に主目標をおいております。

それで、クラスの過半数が受験志望ですから皆がハリキッテ勉強しております。会計士試験以上に科目の多い試験ですから難関たる事はもちろんです。必勝を期しております。

皆さんのご健康とご多幸を祈ります。

竹林ゼミ

竹林祐吉先生

一、ゼミOB会

昨年十一月第二回OB会を梅田の中華料理店で開催。出席者約五〇名。久しぶりに元気な諸氏にお会いできて、楽しい一日でした。本年も同じ頃第三回を開催の予定ですので、万障お繰合せの上是非ご出席下さい。なおその折現住所不明のため、郵便が出せなかったり、返ってきたりしたのが、相当ありましたので、心当りの方は、予めお手数ながら、現住所、現職名、電話番号、卒業年次などを竹林まで連絡しておいて下さい。

二、ゼミ近況

六月下旬に第二回竹林ゼミ・ボーリング大会を開催。高城ゼミとの対抗では残念ながら惜敗。これもわがゼミの年中行事の一つになりそう。また、ゼミOB・ボーリング大会を開催してはという声もチラリ!!。

今年のゼミ旅行は九月上旬北海道に出かける予定。

三、竹林近況

玉井ゼミ

玉井孝弘先生

一、有馬の里で会合をもって以来幹事役の隅田徹君や兄のことに含まれて開いておりません。タルンドルOB諸君の開眼のため、OB名簿の作成、監修を現役幹事に指示しておる。折角協力せよ。

二、昨年は人道主義の見地から希望者全員を收容して八八名のガキ共に手を焼いた。これにこりて今年には面接に当るも八卦、当らぬも八卦、四〇人に絞って二班にわけてガヤガヤやっておる。乱水このみの野性のある男たちがいて頼もしそうじゃ。

十有余年の就職部から解放されて、自由でいいもんだの境地を享受致しております。

西口ゼミ

西口俊子先生

夏前のことです。梅田で四十三年卒のM君にばったりであいました。ところが向うはそしらぬ顔、仕方がないのでこちらは何もいわずにとおりました。数日したらM君より電話あり「先生このあいだおあいしましたねえ」、「あいましたとも、分ってんのやたら何で声をかけへんの」、「そんなこというたって先生、あれだけ肥えて、あれだけ」とってしもたら、こちらとしても本人かどうか自信ありませんもの。M君もはや一児の父、色の白いオトコマエのところは変わらないにしても、年は私とおなじ数だけとっていはず、でも二〇代と四〇代のちがいですがねえ。

ところで卒業生諸兄姉よ。街で「西口先生によくにているけれども西口

渋谷ゼミ

渋谷寿夫先生

一、ことは、わたくしは四、五、六月に病気をしなかつたので割に元気にすごしています。

二、三月に二回目のゼミ卒業生をおくりだしました。今年は四年生十四名、三年生二十三名のゼミ生がいます。生物資源論のゼミとしての基礎がすこしかたまったような気がします。

三、残念ながらOB会はまだひらかれていません。

四、観念的にでなく、科学にもとずいて人間の生命を真に尊重する政治、経済がおこなわれてほしいと生物学者としてつくづく思っています。

杉浦ゼミ

杉浦貫一先生

一、最近ゼミナールOB会を開いたことはありません。忘れた頃数年に一回位あればよいと思っっています。

二、私も年老いて外見だけは元気に見えますが、健康に自信はありません。しかし何んとか頑張っつても有意義な生活をしたいと思っっています。

玉置ゼミ

玉置 保先生

先生は、もっとと美人で、もっとスマートだったな」と思っても勇を鼓して声をかけてください。大い私です。以上近況にかえて……。

濱本ゼミ

濱本 泰先生

一、ゼミOB会の開催を検討中です。良い知恵をかして下さい。

今年こそはOB会名簿を作成したいと思っておりますので、その節は近況をお知らせ下さい。

現在は例のように関ゼミ大会、全日本ゼミ大会(昨年東経大で六部門発表)で頑張っていますのでご安心下さい。

二、小生も元気にくらしております。ご来阪の節はお立寄り下さい。(付)

できましたら近況をいますぐご一報下さい。

勤務先の勤務地とTEL。郵便番号(詳しく)。

現住所とTEL。郵便番号。卒業年度。

松原ゼミ

松原和男先生

一、最近ゼミナールOB会を開いておりません。

二、小生についても何も変わったこととはありません。

平ゼミ

平 実先生

一、開催していません。

二、ゼミナール活動。

一部、二部とも多数のゼミナリスを擁し、国際政治経済情勢の変動に対応して、帝国主義論、国家独占資本主義論の研究に取り組んでいます。

本年九月末頃に「国家独占資本主義の側面」と題する本を千倉書

房より刊行する予定。今校正の最中です。本書内容、国際通貨危機の問題、多国籍企業の問題、ユーロ・ダラー市場問題、スタグフレーションの問題、その他西ドイツの軍産複合体制、小売商業の独占化過程、フランスにおける企業の自己金融、付加価値税などの諸問題を扱ったものです。ゼミOB諸君のご健康とご活躍とを切にお祈りします。またいつかの日お目にかかることをたのしみにしていきます。

松本ゼミ 松本 剛先生

私もやがて経大に勤めてそろそろ十五年になろうとしています。この間、研究の面でも、教育の面でもこれという仕事もしておらず自から恥じるばかりです。初めてのゼミナールの卒業生諸君とはずいぶんながい交際をつづけているわけですが、この頃ではかつての教師と学生という間柄とは異なった関係になっており、その交遊もありがたく思います。また、卒業以来、おたがいに気にはしていても、交遊のとだえてはいる諸君、元気に暮して下さい。

松原ゼミ

松原保太郎先生

O・B諸兄

暑中益々ご健祥お祈り申し上げます。小生不変碌々ながら健康な毎日を送っております。この三月に四回生の諸君と能登方面にゼミ旅行を楽しみました。来る八月には三回生諸兄と(殆んど全員参加予定)信州方面に左記の通り、サブゼミ合宿をする予定です。最寄の、またご都合の叶う諸兄は半日でもご割愛参加下さい。

されば、一同感謝感激至極です。

- 一、日時 八月二十五、二十六、二十七日の二泊三日
- 一、宿舎 長野県上水内郡信濃町 柏原 清和荘 TEL〇二六二五五一一三一九
- (黒姫駅下車徒歩十分)
- 一、連絡先 世話役幹事(現三回生) 玉岡照宏君

(昭和四十八年七月十日発信)

光澤ゼミ 光澤滋朗先生

一、皆々元気に活躍していることと思う。ゼミでは例年の通り夏休み中に英文の宿題を出すなど、ゼミナリストを苦しめることを年中行事としていた。なお、今年のゼミについて特筆すべき一大変化は、例年三〇名を越えたゼミナリストが今年初めて二〇名になったことである。これは少数精鋭主義の反映であるが、これに対する諸君の建設的な意見、批判をまつ。二、OB会(第一回生)秋に開催される予定である。その詳細は名譽幹事、阪口恵造氏にご検討願っている。決定次第連絡したいが、一人の落後者もなく再び一堂に会することを今から楽しみにしている。なお、阪口氏の住所は左記の通りであるので、住所を変更した諸君は早急に連絡されたい。

大槻会

昭和三十三年三月に卒業した私

どうかか実際にはつきりする初会合であったが、出席者全員が「来年はいつやるのか」「連絡をたのむよ」といつて帰られるのを見て、やっぱり開いてよかったと心から思った。もちろん、特筆しなければならぬことは、このように多数の人々が喜んで参加したのは、倉辻先生のご人徳のためのものであって、企画力だけのものではないということである。

各位に感想をいただいてみた。会合時間二時間は短かすぎる、「座席より立食形式の方がベター」などで、倉春会を発展させるために名簿の充実を計るとともに、連絡のスムーズ化を計るために大いに努力し、来年の会合にはより多くの方のご出席をいただけるよう頑張るつもりです。本年度ご連絡のなかった方は、ぜひ正確なご住所を

倉春会

森川利三郎

八月四日(土)、大阪時間の六時(六時三十分)、梅田で第二回の倉春会が盛大に開催されました。さて、倉辻先生の第一回ゼミ生から在学生会まで集めた昨年の発足会——仮称「縦の会」——で、先生のお名前から一字をいただき、春のようにならぬ者集う会という意味

清寿会

昭和四十二年秋、井上ゼミ出身者の有志より「ゼミ出身の同窓会を開いて、井上先生を中心として親睦を深めて行こうじゃないか」という声

が上がり、数名の有志が井上先生を中心に連絡をとり、四十三年一月に創立総会を開き、井上先生より会の名称を清寿会と名付けてもらい、会則を定め役員も選任し、今後二年に一度総会を開いて行うことになりました。以後、井上ゼミ出身の約三百名前後に呼びかけて来ましたが、何分卒業後かなりの年月を経過している人もあり、会として確認出来る人は約百名前後であります。その間四十七年秋には東京支部、四十八年は兵庫支部も結成されました。

本年は清寿会結成五周年を記念し、井上ゼミ出身の同窓会名簿の作成を企画し、第三回総会でも確認され、名簿作成の寄付もびしびし事務局へ送金されており、ぜひ共本年中には立派な名簿を作成しようとする一同はりきっております。

井上ゼミ出身の皆さん、今後益々会の隆盛を図り、全員皆さんの交流を深めて行きたいと思っております。今までに、また最近に清寿会として連絡がとれてない方は至急、事務局へ氏名、住所、勤務先、勤務先住所、電話及び第何回生かをご連絡下さい。また現在、連絡のとれている方も住所変更の場合はぜひとも第何回生かを明記してご連絡をお願いしま

田園地帯も都市化して

本学教授 菊田 太郎

経大の対岸である守口市の淀川本堤下に育ちました私は、幼時、吹田のビール

会社の汽笛で起床し、乳母車で、明治三十年代の淀川の洪水で流入した砂を積み上げた砂山(これは経大敷地や瑞光通宅地の造成に使われた)を眺めながら、吹田駅へ送ってもらった記憶が、今なお鮮明であります。それはそれとして、昭和十二年後期に始めて勤めましてから暫らくは、上新庄駅前を除き、全くの田園地帯であった、北側の水路では魚が釣れ、夜

ていた学生諸君の多くが、第二次大戦で戦死されたことは、何といっても痛恨事です。しかし、当時の学生諸君は非常な勉強好きで、授業時間が多く、長く、内容の充実を要求しましたので、三年間で四年間以上の実質があり、全国高等商業学校の最右翼の一つの名声をあげました。

唯今は、都市化の波に吞まれ、北側の水路は埋められて道路拡張

達には、昼は一社会人として、夜は学生として、思い出多い青春を過ぎました。私達仲間には、ゼミナールを研修の場以外には、一つの心のよりどころとし、卒業後も、こういう場、即ち利害関係を離れた純粋な気持ちを表現し、語れる場を維持していこうと願い、私達全員の発案のもと、大槻ゼミを大槻会と総称し、今後存続することを誓ったものです。

(本学教授)

現在の幹事は次の通りです。
（一）内は卒業回数

- ▽酒井亮介(15) 代表委員長
- ▽木村正作(25) 代表委員▽菅脩(16) 代表委員▽宗田 弘(21)
- ▽小西幸雄(27) ▽樋口満武(23)
- ▽岩佐周平(30) ▽岩崎益夫(26)
- ▽石谷和也() ▽新谷忠憲(26)
- ▽白井莊治(28) ▽杉谷絃一(35)
- ▽石川市造(31) ▽時野 統(15)
- ▽佐藤節夫(26) ▽中村昭吉(21)
- ▽渡辺 実(35) ▽杉浦 敏(26)

東京支部連絡先 中村昭吉

兵庫支部連絡先 木村正作

昭和四十三年一月十四日創立総会
心齋橋のホテル富士屋(大阪経大出身者経営)にて三十六名が出席し、会則等会の基本組織を確認し、出席しない方も五〇〇六〇名の近況報告の返信があり、当日回覧し、最後に校歌を歌って教会しました。

昭和四十五年十二月二日
井上先生経営学部長就任の祝賀会を梅田の大東洋にて中華料理のテーブルを囲んで盛大に行い、井上先生はご夫妻にて出席下さいました。出席者は四十二名

清寿会の歩み

昭和四十六年二月七日
第二回総会を南の湖月にて行い、在校生も出席、会の運営について活発な意見の交換あり、また当日欠席者の近況報告の返信を回覧し、各々の近況を確認し合いました。

昭和四十六年十一月二十七日
井上先生の「アメリカ企業形態論」と会員の酒井亮介氏の「資料大阪水産物流通史」の出版祝賀会を浪速会館にて開催し、出版に至る苦心談、内容の要約を聴き、学校時代の講義を思い出して教会しました。出席者は三十二名で酒井氏の同窓生も二名の出席がありました。また当日出席されない人も本の購読申込者多数あり、事務局より発送しました。出席者三十五名

昭和四十八年六月十日
出席者二十名。各人近況報告し、欠席者よりの近況通信を回覧、夕方に須磨浦を散歩しました。
なお当日は兵庫支部発会式を兼ね

清寿会東京支部について

- 一、東京支部結成について
昭和四十六年十月十六日
東京銀座 日航ホテルにて
東京支部結成 出席者は井上先生他八名(全員)
- 二、第二回清寿会東京支部会
昭和四十八年五月二十六日
東京銀座 日航ホテルにて
出席者は井上先生他七名、二名欠席
- 三、現在東京支部会員 九名
▽三十年卒 二名▽三十一年卒 一名▽三十七年卒 一名
▽四十年卒 一名▽四十四年卒 一名▽四十五年卒 一名
▽四十八年卒 一名

思い出の先生

この号から、新しく「思い出の先生」を企画することにした。すでに四十年を迎える学園史の中で多くの先生を迎え、また送り出してきただけで、きびしかった先生、人情味豊かな先生、ユーモアたっぷりの先生、喜びにつけ、悲しみにつけ、思い出されるのは、その先生達の顔々である。第一回は渋谷先生であった。

先生にはじめてお目にかかったのは昭和十九年四月であったが、その頃はまだまだ危機感もなくうららかな春の日であった。合併教室での二時間続きの授業であったが、先生は例によって羽織、はかま、畳表のぞりのいでたちで、ゆうゆうと教室に入ってきてくれた。私は近眼なのでいつも一番前の席に陣取ることにしていたからよく先生の表情がわかった。私達は古いモンペ、男は国民服、ゲートル姿になっていたが、真夏の先生の細い羽織姿はいかにも涼やかであった。

当時は道義という科目であり、四月から十二月までしか先生の授業はなかったが、私にはもっと長い間いろいろなことを教わった気がする。

「第一回生としての矜持」……講義はこれから始まり終始これに一貫した。昭和商高が大阪女子経済専門学校に生れ変わり私達がその第一回だからというわけである。そして先生は、第一回生としての誇りと、自覚と、責任を力強く説かれた。その講義にはハッとさせられた。

気迫と、不思議な神秘さがあった。私が当時強く先生の講義にひかれたのは、それまで私を受け得なかった宗教精神ともいえるようなものに接したからではなからうか。激しい稲妻にあたったようなものを覚えている。

授業中の先生のお言葉の中で、今でも思い出すのは「為鶏口無為牛後」(小なりとも人の尻に立つべし、大なりとも人の尻につくべからずという喩)である。黒板には鶏の鶏冠と牛の大きなお尻を画かれたが、その画がなかなか禅味があっただけでなく、お尻の横がう一つは「禍福如糾繩」(禍福の互に表裏をなすことは、より合せる繩の如し)である。これも繩を画かれた。夏目漱石の「明暗は表裏の如く、日のおたるところに

渋谷先生 の思い出



年余り全く盲人になった様です

というお便りを最後にた、この糸が切れたようにご消息はぶつ切りたえた。

四十一年の年賀状は付箋がついて帰ってきた。その時、私は正直いって何か不吉な黒い鳥の羽ばたきを感じた。

四十六年春、富山大学に通学している甥からの便りで先生が富山の病院に入院され、昨四十五年、病院でお亡くなりになったことを知った。そして富山に行かなかったことをくやむとともに先生のお言葉を今更ながら思い出した。

「私の本当の生地は氷見と伏木の中間駅『雨晴』の付近、万葉の歌枕として有名な『渋谷』(今は一般に太田と称すれども、太田の山間より海岸に流入する渋谷川の奥の山ろくより海辺までの一地区)の郷であり、万葉集の末の方、第十七、八などには渋谷に関する歌は十許あり、東波漢の本家本元が私の家系です」。

先生には戦後遂にお目にかかれないうままでした。全く申し訳のない思いで一ぱいであるが、今はただ謹んでご冥福をお祈り申し上げますのみとなってしまったことを、かえすがえすも残念に思っている次第である。

「入院手術を受ける。弱視化した眼を回復すべき病状になり、一

二、三挙げて先生を偲んでみたい……(原文のまま)

◇修養と云ふ事の意義を体得せずば人間とは云えぬ。快樂・苦痛は人生奮闘中の一塵埃にすぎぬ。人生は神と我(人)、宇宙と人間との真のつながりを悟り、且つ実現する道場である。小さな是非や、自他を超越せねばならぬ。(三七・八・一三)

◇個人の幸福が国家の、それに基き国家は世界の、世界は宇宙即ち生ける神、万物の絶対の親の恩恵に基く。一方に於て個人の自覚発奮の努力が国家を世界を宇宙を神を即ち絶対者をも動かす力を有する事を真に確認し体験し悟りせずば、人は一個の生ける機械、ロボットたるに過ぎないである。現代人に最も欠如せるはこの根本自覚であり其結果として現前の墮落がある。(三八・年賀)

◇お勸題「草原」(三八・年賀)
風暎や流るる 在のかたはらに 妻子と昼飯をひらく草原

◇お勸題「紙」(三九・年賀)
大空を紙と展べつ 星をもて 訳すや御神天つ真言を

のほりすぎ龍も降ると古の 聖人は易の経書に記せり
さて、最後の通信といわれる四十年の年賀をご紹介します。一 恭賀新年 昨年中は二度も御音信を頂き有難う。その年の初め

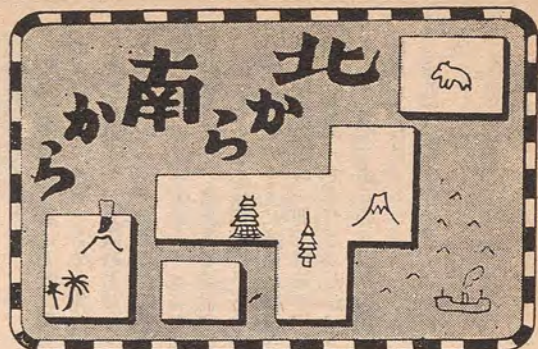
から何となく健康不振なりし処へ三月末に腰を怪我し未だに屋内すら両杖ついて歩行せねばならず、なほ一ケ年も静養を要しませう。お蔭で却て大に心身の修養上一段の深みを増し、正しく七十七才即ち喜寿の実蹟を治めて喜んでいきます。明治二十年十二月二十三日誕生と云うのが本当な戸籍の二十二年七月二十三日は四才から五才にかけて二七〇日間も大病をし、小学校入学に差支えの為め当時の父兄達が心配して役場で戸籍を訂正したらしいのです。明治の初年ではそんな呑気な事も出来たらしいのです。所謂有力者では……

◇姿ゆえ罪なき蛇も嫌わらるる 人も形をつつしめとこそ
そして最後に先生が心残りにしておられたことは

「我が一生をささげて探求し得たる比類なき真実、直接人生観宇宙観を口述して御参考にお供したいものです」(三九・年賀)

「……喜寿に達し余生迫れるを痛感いたしますので八〇才に到達した後、初めて我が幼年二才より修養させられて体得したる人生観、世界観に就き、知己の方々にのみ申上げる所あって出生の因縁を了したいと念願せしも……」(四〇・年賀)

とある点でしょう。(付記・文責 比企)
なお、以上の資料は世良鎌次氏(3)、井川 次子(13)よりいただいたものの中から抜粋したものであることをご諒承いただきとともに、両氏にこの紙面をお借りしてお礼を申し上げます。
●なお、次の十号では米津 次郎先生をしのびたいと思っております。もし資料などお持ちのかたは同窓会事務局までお送り下さい。



アンケート集

この原稿は、同窓会会員の皆さんからお寄せいただいたもので、事務局の名簿に
より無さく抽出で選んだ方々です。
といつても、単に何でも結構ですというわけにもまいりませんので、特に①現況
について ②母校同窓会に希望すること ③同窓の友人などのことで ④自由にお
書き下さい。ということアンケート式の質問に対してお寄せいただいた短信です。
もとより、同窓会会員は全国各地にあって、北は北海道から南は沖縄にいたるま
でそれぞれ活躍中ですが、これはその近況です。

第二回 正木 勉

一、昨年五月、津山市役所勤務を歓奨
退職後表記、水道工事店に再就職中、第
二の人生もなかなかしんどい。
二、阪神附近に在任の卒業生中、有名人
を訪問の上、対談記事を書かされた。
(有名人の割に、世話を焼かない方がお
られると思います)
三、同窓生中、神戸市に在住されてい
た、大段満夫氏の連絡先をお序での節、
お教え下さい。
四、終戦後、田舎へ引込んで、ずるず
ると二十八年過ぎで老年期に近づいた
が、気持ちだけは若いつもりですが無理が
きかなくなりました。時々、菅野和太郎
先生の授業を思い出します。同窓生の諸
君(生き残りの)、当時を思い出して頑
張って下さい。諸先生、同窓会の皆様の
ご清栄をお祈りしつづ。

第三回 塩津 義郎

拜啓 母校益々隆昌の段、お慶び申
し上げます。
さて小生、卒業後、相生市の石川島橋
磨重工に約三十五年間勤務してしました
が、昨年末で停年を迎え、最近表記(在
姫路市)の会社に勤務しております。幸
い健康に恵まれていますので、今迄病氣
らしい病気がかかったこともなく、元氣
に過ごしています。今後ともよろしくお
願ひします。 敬具

第四回 平野 多賀司

此の七月、三十幾年振りに同期生と室
塚にて会合あり、中村、藤原両旧師とも
お会いし昔話に花が咲き、あの上新庄時
代をなつかしく思い出しました。
子供達も未子を除けました。独立し、
金のいらぬようになり割合と満ち足り
た日々を送っております。しかし体の方
は昔日のような元氣さはなくなり、自然
の摂理の妙を思わせる今日此頃です。
終りに母校の発展と同窓生諸兄のご健
康を切にお祈りいたします。

第六回 阿部 英臣

昭和十五年卒業と同時に満洲電業に就
職、十六年二月入隊、二十年復員、復員
と同時に興亜火災入社。福岡、鹿児島、
小倉、東京、札幌、東京と転勤し、四七
年七月から表記の所に勤務しておりま
す。卒業以来ご無沙汰致し申訳ありませ
ん。現在、元氣に仕事と生活を楽しんで
います。附近お通りの節はお立寄り下さ
い。機会を与えられましたので誌上をか
り永年のご無音をお詫び申し上げます。

第三回 木野 伊三郎

同窓会の皆様に一報の榮に浴しまし
た。停年の年になり、第二の人生を神秘
の屋久杉、海上アルプスの鹿児島より百
数キロ離れた屋久島に求めて数年、同期
に徳島大学の福井、刈谷の大多和の諸氏
も同じ思いで時々行かれます。我々より
先に踏み込まれた同期の加茂君もおられ
まして心強く思っております。もし一
度、観光にこられるような折は一報下さ
い。案内まで出来ませんが、アドバイ
ス致します。島のおばらやですがご利用
下さい。温泉のあるのがとりにえです。皆
様に一報まで。

第十六回・第十八回 吉田 功

無作意抽出方法で昨年の瀬江にも近況
を記載したが今回も抽出された。同窓の
方々にはまた吉田の記事が出ていと苦
笑されることだろう。昨年の春に十五年
ぶりに勤務先の大飯店に赴任してこのか
た二年余、この間二、三度母校を訪問し
たが当時の諸先生方に面会することが出
来ず残念である。しかし同窓の諸氏数十
人には旧交を暖めさせて頂いていること
は洵に幸である。また仕事の面におい
ても何かと協力ご支援を頂いていること
を此の紙面に感謝したい。お互いに
家庭をもち、企業の中核にいる連中には
仲々自分の時間というものがとれないの
で立入った話も出来ないが、久しぶりに
会って直ぐヤアヤアと心の打ちとけるの
は矢張り同じ学園で学んだ連中だからこ
そである。その意味においても同窓生
というものは有難いものであり、大切に
しなければと思ふ。諸兄の健斗を祈る。

第十八回 原田 実

健康をそこご断食療法。玄米菜食
の食養とひたすら健康への途を歩んたた
め今年の猛暑でもいつもの年よりも元
氣で夏を過ごして参りました。将来は自
分の健康回復の体験を生かして何か社会
的に役立つことを考えようと思つており
ますが、目下は岡山を表町で三彩画廊と
いうささやかなギャラリーを経営してお
り、美しいもの真実の美を愛する人々の
ために良心的姿勢で処しております。
それにしても大学の教養課程で履修し
た「美学」がこんなことに役立つとは
全く思いもかけなかったことです。学園
創立者の黒正先生の生誕の地だけに先生
ご存命ならばと思ふことが多うございま
す。ところで商用で新幹線を利用しよく
東京に参りますが、車窓から眺める母校
の偉容に昔の旧校舎に学んだものとして
少なからぬ誇りを感じます。そして
「経済」の大学に留らず文化全般の大
学として飛躍の発展を望むものです。
最後に文化視察として海外(中国でも
ヨーロッパでも)旅行を同窓会で計画さ
れましたら是非参加したく思っております。
母校の発展と同窓会の会員の皆様のご
健勝を念じて欄筆します。

第一回 中島 清保
長い間、皆様にご無沙汰いたしました
申し訳ありません。小生こと二五年の長
きに亘り奉職しました裁判所も悠々、来
年三月末をもって停年退官することに
なりました。その後の事は目下決めてお
りませんが、一社会人としてなんとか人の
世話に役立ちたいと存じております。
小生も一男一女を病氣で失ない、目下
三人の親として元氣に暮らししておりま
す。一度退官のあかつきは皆様のお願に
も接したいと存じ楽しみにしております。
在官中は多忙のため一度も出席し得
ず誠に残念に存じております。

第二回 杉野 正二

瀬江毎号有難う。うれしく拝読してい
ます。また、私の番が来た。何か書けと
の事では。何年前に詳しい現況をお
報せ申し上げましたが、浮世の風は冷た
く、唯今現在、不治の病にて社会生活不
能に近い毎日を過しております。

第二回 佐伯 五郎

同窓会のお便りを頂きまして有難うご
ざいました。平素はご無音に過ぎ、失礼
いたしております。
今後も益々ご発展をお祈り申し上げて
おります。
鐘紡株式会社理事(役員待遇)、渉外
部副室長兼渉外部長にて、元氣に勤務い
たしております。

第六回 立川 外海

毎日お暑い日々がつづいております。
いつもいろいろとご連絡頂きまして有難
うございます。主人外海、昭和四十七年
一月病氣のため死去致しました。いつか
ご通知さし上げたように存じておりま
すが何のお役にもたせませず申訳ござい
ません。暑さのきびしい折、皆様ご自愛
下さいませう。失礼致します。立川房子

第七回 宇野 孫三郎

山の斜面に小屋を建てました。小鳥が
鳴き、谷川の流れの音が聞こえてきて、
久しぶりに吾に帰ったように思われま
す。金で面を張る世は誠にいやです。昔
の学生の頃、やんちゃをしていた頃が一
番たのしかったね。
その頃の連中一度会ってみたいと思
います。同クラスの岡山県の方々にはよ
く会って連絡し合っております。

第九回 和泉 良映

現在、地方の七〇名位の会社の役員を
しています。
福山では毎年、昭和商高、大阪経済大
学の同窓会を年一回開いていますが、仲
々楽しいものです。九回生の同窓会を今
年、箕面でやり、三〇年振りに友人の元
氣な姿を眺めて嬉しく思いました。
福山で八月の始めに同窓会を開く予定
で出席するのが楽しみです。

第十回 国栖 晃

国民金融公庫に勤めて二年になりま
す。京都支店を振り出しに、名古屋、神

第十五回 井口 淳

北九州に来たのが昭和二十九年二月、
大阪人でありながら、現在ではほとんど
九州人になった心境。北九州も「住めば
都」で良い所です。こちらへ来られる方
がありましたらお立寄り下さい。
経大九州支部総会には毎年、出席させ
ていただいておりますが荒牧様の並々な
らぬご苦労には頭が下ります。私達の経
大がますます立派な大学になることを祈

第十六回・第十九回 田 潤 宏

一、約一年前の八月に現住所に転宅致
しました。国鉄磯子駅から標高二百米：
そんなないかな？の処にあるため夏で
も涼しい風が吹き、春先は近所の林でウ
グイスがさえずっております。公害からは
離れた山登りに毎日閉口して
います。
二、最近余り同窓生との交際がありま
せんのでお便りお待ちしております。東
京支部の方で社用でこられることがあり
ます。皆さんお元氣で。

第十八回 山口 五郎 (旧姓福田)

今年も終戦記念日がやって来た。早い
ものでもう二十八回目になる。二十八
年前の私は旧制中学三年生で学徒動員で香
里の陸軍軍需工場火薬廠に引っぱり出さ

住所 岡山市原尾島二二六一
勤先 三彩画廊(自営)

第十九回 小南 勝弘

一、毎日、元気で町工場の経営に努力しております。更に今年はロータリクラブの幹事をやらされて対外的にも忙しい日々でいろいろと勉強しています。
二、同窓会誌に同窓生の近況報告と同時に最近の顔写真でも掲載して頂ければ一層懐かしさが強まると思います。
三、軟式野球部出身の同窓生とは年に二回位定期的に会っております。

第十九回 吉本 晋一

益々伸びて行く同窓会、充実して行く会誌、うれしくなつかしく拝見しております。社命で高知へ転動してから既に十六年余、上阪の都度立派になった母校をチョットだけのぞいてみたいと思いが、ツイソコという感じでなかなか果せられん。小生の記憶と言え、古ぼけた校舎、丸い時計：動いていたのかな：授業料滞納のため恐怖感にみちた中庭の掲示板、電車軌条跡の残っているグラウンド、なかなか来ないワンマンバス(当時の流行)を待ちあぐねて瑞光通バス停まで歩いたホコリッポイ道、そうそうその頃の天六筋はまだヤミ市の面影をチョッパリ残しており、デコちゃんの「銀座カンカン娘」が街を流れていました。会報で拝見する諸先生方、随分お年をとられました。今更亡き秋本先生の作られた学歌発表が、たしか、毎日会館で大学祭の折、発表されました。大学前の木立の緑と共に、いつまでもあの当時は想ひます。学歌の主張するように大学も後輩諸君も、大権のごとくのびのびと孤高を保って、そんじよそこいらの駅弁大学にならぬよう自主性と独自性を発揮して下さい。同期の林、刀禰、今西、北川の諸君お元気ですか。ご米高の際はお立寄下さい。一パイについては高知勢にひけはとりません。

第二十一回 大間知 寛二

当時すでに地方公務員でありました私は、仕事の関係で学校へは行くや行かずで、不定期便学生でありました。幸い、大和の連れ何んとかで高校から共に進学した九人のご支援により無事卒業いたしました。その内の一人、旧姓藤村秀和氏は昨年十一月急逝されました。本当にさみしい気がいたしました。最近感じますことは、健康こそもので、今までは如何に疲労を回復させるかを、いかにして疲労をはねかえすかと方向転換して、最小の費用をかけて、なわとびをはじめているところでございます。

第二十三回 大崎 美明

今日の新聞紙上に、日本人の平均寿命が男七十二・五才、女七十六・五才のび、欧米を抜き一挙に北歐三カ国のそれに近づいた事を報じておりました。ついでには職務上からのスウェーデン人について八年間にわたる私見を今日はセックス抜きで一つ。
外交官、高級船員、民間人、狭い範囲内での接触から、一國の国民性を云々する事は危険ですが、他に付合のある数多くの外国人の中にはスウェーデン人は気が高く、非社交的で不親切であると非難する人がおられます。確かに内向的で、底抜けに明るくという事はないようです。また、小生同様、中年以上の年齢層には日本の封建思想を持つ人が多くみかけられます。がしかし、外側のカラを破れば、そこには暖かい心があります。当然親切の押し売りはしない。がしかし頼まれれば徹底的に親切である。このタイプであり、礼節を尊びます。日本人も勤勉であると言われていますがスウェーデン人もまた、非常に勤勉です。たゞ、日本人のように器用に手早くやるというのではなく、正確に辛抱強くやる型です。この国民性がすばらしい社会保障制度のもとで、今日のこの高度な科学、医学、産業技術を生み出したのかもしれない。終りに私の大嫌いな長髪族がこの私の

先輩諸氏 原稿をおよせ下さい

「澗江」はわれわれ同窓生の機関誌です。みなさんのご協力を得て今後ますます立派なものにしていきたく存じます。つきましては、みなさま方の原稿を心からのぞんでいきます。随想ももちろん結構ですし、短歌、俳句、川柳、なんでも結構です。遠慮なさらずどしどし編集部までおよせ下さい。

大好きな国が発祥地である事が残念ではありません。なお、スウェーデンについての資料、質問がありましたら左記へどしどしご連絡下さい。

第二十四回 木村 栄

月日のたつのも早いもので小生が卒業してからすでに十五年が経過しておりますが、その間学校の先生並びに諸先輩をはじめ同級生や後輩の皆様方には全くのご無沙汰を致し、今回澗江の紙面をお借り致しましてお詫び申し上げる次第です。

さて小生昨今の社会のめまぐるしい変化に対応するのに毎日青息吐息致しております。先日軟式野球部の同期の桜である阪下後一君からゴルフをしようではないかと誘われ、同じクラブメイトの藤原克己君、ラグビー部OBの高橋一夫君の四人で武庫の台カントリーで楽しい一日を過ごしました。久しぶりで出合ったにもかかわらず気がねなく愉快なプレーが出来たことはやはりなつかしい学生時代の気分に戻っていたのではないでしょう。ホテルアウトの後、食事をしながら楽しく語り合いましたが昔と少しも変らな悪友がゴルフにかけては大変上手になっているのでびっくりした次第です。このようにおわずが四人でしたが愉快な一日

第二十四回 藤家 順

先日、一葉の便りが舞い込んで来た。同窓会から一筆、近況を知らせとのことである。私が学校を出てから、もう十五年余にもなる。こうして筆を手にする間にも、昔日の学舎での好き日々が想い出されて来る。良き師や友との出会い、教授との茶話、信州冬山でのスキーツアー、レーンボールの対抗試合にスパー選手として参加したこと、当時、肉

在東京の方がありましたら、情報でもいただけたら幸いです。

第三十二回 川島 清春

第三十二回同窓生の皆さん、元気ですか。昭和四十七年度同窓会が十一月三日、文化の日であったことをみなさんも周知のことだっと思ひます。当日は晩秋の雨に見舞われてしまい、降りしきる雨の中を藤田先生(我々の頃の学長)と一緒にタクシーに乗り、車中で「今日は朝からあいにくの雨で、同窓会が一寸淋しくなるのでは」と話しながらおもむいたのであった。

私達二部の卒業生は、大半が職場と学校へという時間のゆとりのない構造にはばまれていたためか、授業外でのクラブ活動とか同好会、学友会という横のコミニケーションにどうしても乏しくなってしまう。自ずと在学中にあって得た友というものは、一部のかれらと比べたら数少ないのではないかと思うのです。それだけにせめて同窓会で誰かと会えるだろうと、朝からのいささかきびしい雨の中をついてのぞんだのであった。確かに前回と比べると道中の悪いためか、少ない同窓の集りであった。

学校周辺もしばらくご無沙汰をしている間にずいぶん整備されてしまい、我々が夜道を急いだ所が跡形もなく様相を変えていくには、時代の一つの流れをおぼえずにはいられない。

さて、同窓会での懇親会に移って、誰か三十二回の同窓の友にと、端から端へと移動しながら探しまわったのであった。何とあの探しまわっている間のむなし気持であったらう。私の目に写るのは三十二回の友がいなかったのだ。せめて、せめてお世話になった北里先生にはと思ひ、先生は怪我の療養で出席されていないとかでお会いできます。同窓会へ行つてなつかしい友と会える

ことを楽しみにしていただけに、まったくさびしいさびしい限りであった。この記事を依頼された時、ヨシノ同窓会にみんなで出席をと、こうしてペンを走らせているのですが、せめて同窓会には顔を見せて普段の数少ないコミニケーションを交そうではありませんか。「ナツカンイナノ」、「オオノヒサジブリ」これだけ交差だけでも、何年か後に会ったかがあるのではないですか。

末尾に私事ですが、三年程前から、歴史と史跡の町、榑原神宮を目前にした一画に茅家を構えています。晩夏と共に虫の鳴き声があちこちに聞え、公書など近よりたくても遠慮せざるをえない所です。来近の折にはぜひこのスバラシイ空気を吸いにおいで下さい。今度の同窓会には、みなさん多忙をきわめていても、一日あけてぜひ会いましょう。ごきげんよう。八月三十一日記。

第三十三回 中村 政英

当、日南へ帰って来て早、一年少々過ぎましたが、家業を引きついで頑張っておりますが、田舎のこぢんまりしたムードでめくらいましたが、なれてまいりまして私ものんびりと過しております。仕事の関係上、年に二、三度は上阪いたしますので、友人に会つては楽しい昔話をしております。

宮崎県内には同窓生が現在のところ、二、三人しかおりませんが、離れておりますので、たまにしか会つておりません。新婚・旧婚旅行にはぜひ、緑と太陽の日南海岸にお越し下さいませ。

第三十四回 木村 義政
経大を卒業して早や五年余か月。社会人としていろいろと考えめぐらせる年頃である。
卒業して二年程、インテリア専門の最大手商社に勤務後、現在の通信用紙、コンピュータ用紙、記録紙製造販売の日本通信紙(株)大阪支店に入つて四年と余か

北から南から

第二十八回 平井 健雄

「天高く、馬こゆる秋」
私はこの四月以来、東京の勤務とな

第二十六回 池田 常雄

一、現在、阪急宝塚線売布駅前にて舶来洋品雑貨及びオーダーメイドの店「サン秘乃」を小さいながらも経営しております。

二、学校の新聞記事を同窓会より送っていただきたいです。

三、硬式庭球部におりましたのでその時の同級の川端氏、井上氏とはよく逢つております。その他の人とは電話にて話しております。川端氏(帝人商事)、井上氏(紳士服自営)、松井氏(松井商店)、中村氏(三星堂)、提氏(つるや)、皆さん第一線でがんばつておられます。

四、編集部の皆様、本当にご苦勞様です。よろしくおねがいします。

第二十七回 伊藤 宏

前略、ご発展なによりに思つています。やはり卒業生である以上、母校の評判が良くなつてくれる事が自分の値打ちもある事になり一番願う事です。今後とも質の向上を第一により優秀な学生を生みだすべく努力して戴きたい。私も努力し、母校の学生諸君を採用する事を夢みております。草々。

第二十八回 桜井 富雄

一、国際電信電話株式会社で、電子計算機のシステム設計とやらをやっております。
二、特になし
三、年賀状を若干やりとりしているのみです。電算機メーカーに入られている

北から南から

月。営業部営業デスク主任として毎日、多忙の中でハッスルしています。昭和四十六年十月に結婚、今や一児（長女・生後十一カ月）の父としていろんな意味で、社会的責任をも感ずる今日のごころである。

在学中、経営経済研究部在籍、倉辻ゼミナールに所属、同期の人、ずいぶんご無沙汰しています。一度TELでも下さいます。

第三十七回 岡本 達夫
私、卒業致しまして二年五カ月、漸く社会人としての認識ができてまいりました。現在、表記の会社にて営業員として活動中。



北から南から
暑い暑い夏が終つて、やっと爽やかな秋風が立ちはじめると、編集部には苦難の時が訪れる。

今年も例外ではない。全国各地から寄せられた貴重な原稿、これを一字一句漏さず、このちっぽけな誌面に盛り込んでいくというのだから難行である。

それにしても、この薄っぺらさがなんともうらめしい。郵便料の定形二十五円が魅力で、昨年からはページを断行したのだが、それに、原稿依頼の方も消極的。活字が小さすぎるといってお叱りもあって、また、今年から「北から南から」を除いてほかは8ポ活字に復活したために、原稿依頼が少なくなった。

動いています。卒業以来いろいろな状況に出合いましたが、やはり大学時代の友人（特にクラブ活動）や先輩方とは親しく交際していただいています。何が支えになるかと申ししていますが、大学時代同じ苦勞、同じ釜のめしを食った友人程、全ての面で話せる相手はいません。なまじつかな勉強に時間をついやすより、何か一つの事に若い情熱を燃やせる人間になる事が大事ではないかと、つくづく思っています。

第三十七回 須賀 宣裕
四十六年卒業以来、同窓会誌は一度もいただいたりありません。住所変更などもその度いたしています。年一回？の同窓会の案内が今までに一度しかありませんでした。同窓生名簿の配布などをされて

されない。最少の紙面で、より大きな効果をと、編集部への責任も重大である。

時に、今年の名簿の改訂の年でもあった。しかし、理事会でのお許しも得たが、二万人を越す卒業生をひかえて、製作費が馬鹿にならない。いずれ売却によってペイするにしても一時の費用の捻出が、限られた同窓会予算の中ではないかなにかにむずかしい。そこで、三年に一度をあらためてもらって、五年に一度としていただいた。

ために、今年から少しずつ積み立てをして、昭和五十年度に発行することになった。

その時の卒業生数は二万五千人にもなるだろう。考えるだけでも作業が大変だ。小人数の編集部ではもうとてもものにこなし切れない。現況である。

誰か奇特な人があれば、お助けを願いたいと切実に思う。

特に校正が大変である。本職を投げ出して、何日間か没頭しても、とてもこなし切れる量ではない。

はいかがですか。日本各地におられる同窓生の集まりの会をもつように（例えば広島県在任の経大生の集まりとか）企画されるとよいと思います。

勝手なことを書きましたが、今後の活躍を期待します。

第三十七回 古本 佐世子
卒業して、早や三年目を迎えておりますが、日々平穩に暮らしております。同窓生の皆様、いかがお過ごしでしょうか？

先年、故人となられた恩師、池内先生の安らかなご永眠をお祈りいたします。住所 相生市那波本町十二二三

第三十八回 大内 雄司
東京に来て早いものでもう一年半た

二年先きの話であるが、お暇な方には是非ご協力をいただきたい。

ぐちばかりが出て申し訳なかったが、編集をやっていた一番うれしいのは、同窓生はもとより、学園をあげてご協力をいただけることである。

学長先生をはじめ、諸先生から（ゼミ短信）事務局の方々にいたるまで積極的に、しかもこころよく原稿にしろ、写真にしろ出しているだけのことである。

昨年だったか、僅か二六ページの冊子で一体何人にご執筆していただいたか勘定してみたいことがある。実に一〇七名の名前が連なっている。投書新聞はおくとして、こんな誌面もほんとうに珍らしいだろう。

これだけの人達のご苦心と、ご苦勞の結晶がこの会誌なのである。ゆめゆめゆるがせに出来ない同窓会誌である。

心からご執筆をいただいた方々、ご協力いただいた方々に礼申し上げる次第である。（松本記）

学歌

作詞 故秋本吉郎（元本学教授）
作曲 柴田南雄（東京芸術大学教授）

一 大淀の

水は春ゆく ゆたかな春だ
芽立つ葦原 緑がしみる
この若さ
希望は明るい 蒼空かけて
永遠の青春 みなぎる学園
大阪 大阪経済大学

二 大樟の

蔭は裕々 夏風そよぐ
学徒師弟が 幹負ひもちて
諸汗に
確つかと植えた 融和の象徴
繁れ自由の 花さく学園
大阪 大阪経済大学

三 そびえたつ

白亜の殿堂 秋空高い
澄んだ心に 鐘なりわたる
晴れ空だ
ひらく真理の 扉につどふ
面はかがやく 求理の学園
大阪 大阪経済大学

四 濛標

世界の商都の 入船出般
水先みちびく 経済実践
前途はるか
氷る潮路も 乗切る気力だ
自由で揺がぬ 自治立つ学園
大阪 大阪経済大学

逍遙歌

作詩 中村行男
作曲 松川圭一

(一) 此処城北に迎えたる

紺碧淀の春の夢
惜春の賦のたゞよえば
薫風静かに流れ来て
逝きし苦節の十余年
歴史は吾等に教うなり

(二) 水やにこれる人の世に

真理求めて遊ぶ子の
友愛久遠に変わらまじ
汝が悲しみに我は泣き
吾が喜びに君や舞う
惜みて励め我が春を

(三) 集いの庭を共にせし

我が学舎の乙女子は
愁の時は過ぎ去りて
理想の遠地にひたぶるに
幸を求めて馳けるとや
感激新たな此の曲に

(四) 虫の音すだく秋来れば

小川こよなくさびた、え
こち吹く風に花なびき
自然しなうて逍遙の
尋ぬる途は遠くして
雍露人生はかなしや

ち、職場にも大分なれた感じですが、おそらく私の職場で経大出身者は私一人ではないかと思ひます。

同窓会に希望することですが、同窓生の現住所、勤務先等はなるべく、くわしく調べて名簿を作成して下さい。また、名簿の配布はどうなっているのでしょうか。毎年、定期的に配布すればよいと思ひます。同窓会も十一月に行なわれる総会に出席できない人は、各支部で別れてやってもよいと思ひます。

第三十八回 新田 雅美
同窓生のみなさま、いかがお過ごしですか？ 私はどうかと、ここ名古屋のド真中にあるビルの六階で事務をとりつつ平凡な日々を送っている次第です。でも、このような日々もあとわずかで終わろうとしています。私、お嫁さんに行くつもりです。やっとなつかました人です。お嫁にもらってやるかという人。やっと思ひでつかまえた人ですもの、そうたやすく手離すわけにはいかないとかかりに、しっかりとくくりつけて相手が何と言おうと知らぬ顔。あとは結婚式を待つばかりといったところですが。

江 第 9 号
昭和48年11月1日発行

編集者 山中 良夫
発行所 大阪経済大学同窓会
大阪市東淀川区大隅通2丁目
電話 (328) 2431~3番

印刷所 共成社印刷株式会社
大阪市北区葉村町40番地
電話 大阪 (371) 0254番

(五) 乱る金剛枯風の

叫ぶ野嵐粉吹雪
緑定石に竹ずめば
無言に教うる湖風の
肌にしびしき鞭なれど
懐古楽しや語り草

(六) 霜ふみ通うこの朝

暮る、易きやこの夕
真冬寒波の寄せ来てや
淡き光のいざないに
汝が故郷を偲ぶれば
鐘の音さびし瑞光寺

(七) 小鳥が森に歌うとも

小羊野辺にたわむとも
さすらい旅の此の世には
花びら風に待たずして
春や心の乙女子は
はかなき恋に泣くとかや

(八) 想いめぐりて尽きぬ時

緑が原に人訪えば
落葉か、れる語らいに
愁憂の声今はなく
新たに目醒むる者のみの
微笑は花に映ずなり



大阪経済大学同窓会誌

NO. 9